



9
1733
1



1733

崎陽求林齋西川先生著

町人囊底

平安城書林柳枝軒刊行



町人囊底

聞こころは家持とやらあしむもはく筆庫の
底より留りし紙をいかに捨てる人も本意をて
のほくまきあつめたりぬいさう所ふねとみそ
ふも何と家童子にわさる書畫ぬいの眠
さほふもがれ土器のてれよも用なりやされば
字間いを食うて治めようふ何れもとよりこみ
金とこそ撰い用ゆへとぞ玄青は平いのは
い金一此とよりおのい出つ町人袋とより
世俗乃糟粕といへりともるこみ金とるも

く撰ひしむらひととせしと素より愚みけこ
なれ身なれば撰ひ用ゆべさらうもあくあ
袋乃ち店より醜くく成ぬ集ちくは集あ
るも撰ふ事とあふいどん何の用より立べ
さく我あぐりあうくて分別囊乃ちいんを
ぬもやうな處とせあくの多いどさうり
獨はづやういとかいゆれりどんかな
おじらめえさうの秋れりんけ

長崎 西川求林齋書

町人囊卷一

或人の云町人よ生れて其みらと樂さんと思ひ
すべ町人れ品位とせしや町人の町人る理と
知てのら其を正し其身をわさめべ
いふくは聖人乃書紙考するみ人間
立りの正位なり是を五等の人倫といふ
第一は天子第二は諸侯第三は卿大夫第四
は士第五は庶人なり是を日なりていふ
天子の禁中様諸侯の諸大名庶郷
大夫の鎮守官位の諸物頭士の諸旗本

官乃多也公方様くわうほうの禁中様きんちゆうは次で諸候の
主しゅより級小公方家の侍さむらいの無官むくわんなりといふとも
せられたる六位ろくゐは準のりに依より例れいなり公方家の
侍さむらいの外ほかに諸家中しよかちゆうにもふみみ陪臣ばいしんといふも又
内うちの侍さむらいといふも庶人しよじんけうらなりといふも其内
一國の家老けさうより人ひとに諸候しよこうのたまはれたる公方家
の侍さむらいは準のりに依より其外そとの國くにの諸侍しよさむらい扶持切米
の面おもてといふもみみ庶人しよじんなりぬ庶人しよじんは四つれ
品しんなり是と四民しよみんと号なづきより士農工商しにうこうといふなり
二つなりといふ諸國しよこく又内うちの諸侍しよさむらいなり農のうの耕作こくさく

人ひとより今いまの是これを百姓ひやくしやうと号なづけ工こうに諸職しよしやく人ひとより
商しやうの商賈しやうかう人ひとより上の五等ごとうと此四民このしよみんの天理自然てんりしぜんの
人倫じんりんと号なづけ此四民このしよみんより上の五等ごとうは人倫じんりん
といふなり此級このきゆうより世尊萬國せそんばんこくといふ此四民このしよみんの
國土こくどのちよめ用もちなれた人間にんかうなりといふなり此四民このしよみん
のちよ工こうと商しやうと依よりて町人まちうと号なづきよりいふなり
百姓ひやくしやうより町人まちうの下座げざなりといふもいははより
天下てんか金銀きんぎんはくといふなりて天下てんかの金銀財寶きんぎんさいほう
みる町人まちうの方かたは主しゅといふなりて貴人きじんの御前ごぜん

あつちしどしと

武学者のいつかいつかの四民おのゝ其業と云ふ
はあて相とる事なりし近代の百姓職人
いづれも商賣と云ふ武士いづれも商賣と云ふ
似る歟のいふも又いふもま商のみといふ
金銀をいづて物を賞より利倍と云ふをいふ
事公のいふは商の字れんい商量といひて
物の多少好悪をいひけりて用紙より利徳を
得るのみ是商の歟なりといふ金銀といふ
事あて唯のいふて物は易なりと云ふ

易といふ都て物の多少と云ふと量損益と考
へ多其利と云ふなりて中其の物紙にてたれ
乃物より我國の物を持て人乃國乃物より
天下れ財物を通て國家の用を達より紙奥の
商人といふなり末代れ所人といふ紙よりて人乃
目紙より紙より賞より賣の歟と云ふ天下れ
毒蛇より若幸なりて富と得るなりといふ浮
きり雲のいふて久しかりて況や町人
わづらふ人を謀計に眼前の利潤よりいふ
必と神明の罰とわづらふらんおそれけり

ふれた事なりと語れ

町人多く其うち一人のうらゝ侍の侍さ
く学者の学もさく味増けりさくさくは
一と二人れ宿むのうらゝゆふたねと
ゆりまう町人へ町人へさくさくは
をいふれ一足りあつりかたれ

或人のゆふ商人常の口やふ商人と屏風を
曲まひさくはいつてさくさくはわ
わつた家の年久ふお屏風の精妖て商人
の夢ふさつてさくはさくは曲りもの

の思ひまうと口惜くゆふゆふてあつは我
をわびのうらゝじつとさくは徳用をさくは
強て開きのうら゠片時をさくはさくは
ひささく何れひささくはさくはさくの中
道をさくはさくはさくはさくはさくは
り地平ふさくはさくはさくはさくは
まう是第一の開きなり主り先りの一心り地を
さくはさくはさくはさくはさくはさくは
考てあつふ開きなりさくはさくはさくは
り身をさくはさくはさくはさくはさくは

へ主此よりとあらばて我といふやうものと
のくを得る口惜くゆくと恨くやうやあき
事あらば捨てたよりゆや

ある人の云驕ふものかゆといふと中にも所人
ふ多き事也驕ふといふは強ふ財寶と貴一
失ふものといふやわづらうや所人の云はる
よりよとゆいとみさるは驕といふべし況や過美
風流の遊びやあてをや傲い萬惡け基やうや
うにいれりといふ是より起る易い云負て且
乗寇乃到ふと云致と負りた者一とあり

負て乗といふ人足るに賤き風情なうが荷物など
負あが輿車に乗付て盗人の軍をを宿貴たり
者とあひ殺して物取奪いする事あり是み此
方より寇をまのさ致する也いやさ町人結搦たり
衣襲きて遊ぶよゆと遊ぶはよきとあら
下賤の身として上はたう人のうやといふと何
い寇乃と云といふべしあき智恵才覚あるそ
行儀作法は人成り身乃か際町人の位と知
ぬ人の危事かり是と負あはれも客一とはいふ
といふと藏を慢る盗り誣り也容公治の淫

論なりといふ庫内くらうちの財寶さいほうを常つねに用もちひ
て守まもりと懈ゆるむといふ此方このあたより盗人たうじんはねとて誨しか
るなり女をの勝かちて娼客しやうかくとてけくく誨しか
淫えん乱らんなる男をに此方このあたより我われといふものせし誨し者
なり其そのくふ所ところ人ひとをのちのこつ中なかつき位くらい成なりを
知しどと分ぶん法ぽうといふて凡ふつ俗じやく過か多た故ゆゑなるふとい
皆みな此こののまて禍わざはひとす移うつ也なり禍福くふ門もんを唯一ただひと人ひとが
くす移うつくといゆと語かたけし

或ある學者がくしやの云いふ易えきけ諸しよ善ぜんを積つみむといふ名なはふといふ
るに悪あくといふまされい身をあらばといふをいふ

いふにわづらふふを得える人ひとはなりや悪あくといふ
悪あくといふ身みをあらばといふまされいといふをいふ
あるに小悪せうあくあり大悪だいあくありといふて移うつする
らん況いはんや大悪だいあくとや小悪せうあくといふて時の運うんによりて
一旦いつたんやて忽たちまちに災わざはひの到いたるあり何なんぞ積つみむ
ゆゑんやゆゑん運うんはくといふて忽たちまちに災わざはひの到いたるありとい
ふに移うつるありといふに終つひにけりといふに成なりく身をいふ
が家けと失うしなふといふ小善せうぜんはくといふて益えきありとい
ふに小悪せうあくといふて傷やぶるといふといふに成なりくといふに
悪あく極ごくといふて掩おほふといふ是こゝ聖人せいじんのいふなり又また曰いふ

田舎集卷一
積善の家必と餘慶なり積不善の家必と
餘殃なりとい孔子の評識なり臣君はるる父子又
をあると事一朝一夕の思ふに其由てきり
而の漸くたりといふをこそ一君はるるを
惡するの始に僅なり一念の惡りたりて其惡念
漸く廣大に到て終に成るるの殃なりもの也
一朝一夕の不けたり殃にいはれ餘をかり
も一朝一夕の善にいはれ小善といへも積事
久しきは身のみならず子孫のものとありたり
積といふはあがらに千度百度のことはあり

二度三度とふも是積といふものなり況や千度百
度をや霜を踏ぐまき氷に到るものなりも小
惡則大惡なり也なぐ霜を踏ぐと終に成る
き氷と冰のなりといはれ終に有る事
なり又古語は岷江姑の鰲と渡り楚に入て則ち
河といふと孟浪といふかの浅き水も積りて
楚といふ國といふ岷江といふ處をみま深き水と
なり古語にその水と氷なりといふの雪下萩
の下露といふものなり同じなりといふ
或人の云清水は魚とゆずといふふや家語に

書の中に水至る清とあるに即魚を一人至て察
するに則後かゝり世の諺も是よりやいふ
らうと云ふ此語は少し別義あり人のあつた
才智とて物毎深察緊密なる所いふにす
れ一國の控をいふに足るに足るに足るに
よるに萬人をばくこれ一至て清きこと
到のまけいはいはれとて考ふの小解と考ふ
ことこのまけいも是なりとて町人などの公儀の
控のすに緊密なる所い清水は魚とあらずと口
をきつては度ゆふをきとるをとて秘とて

おしきこれ魚のちあつたや魚も魚とて
よるに鱸はつとて泥まねとあつたもの
うしとてあつたもの

或人の云長者二代ありといふと一代とあつた
いかに一生辛苦積んで清く富むといふ子孫
ふもつたといはれぬとて車馬は清く驕る
とて財寶と費し失つて古今清くあつた
中にも町人の常の禄をけいといふと富むと
ら難しとて驕るなりとて費し失つた
よのまけやうとて道理をいふと不孝の罪なり

ゆゑに家財は先祖より子孫常久のころは貯へ置れ
し物されい我身一分の榮えは貴しきといふ大なる罪
人なりおのきまつてふて又我子に譲りあてふは
先祖よりけし物をも先祖よりと道理あり是
孝行の第一なり書經の無逸より父母稼穡は勸勞
と云ふ其子稼穡乃艱難を云ふは乃逸して乃
諍し既し誕かきわつていふも先祖の質素艱苦
をいふて安樂放逸を云ふて終に家業破や
ぶ事なりはしめたるなり

或人戯て云かれ簍くは簍くといふの鬼が鳴る

有るやうな物より人よりありやといふ其言は
留る氣のありが我々とするの寶物とすて今
く富より深く信じてあてふといふ其言は
おとといふ別の物にゆゑにま鬼といふ鬼神
に横道なりと云ふ正直なるものなり取捨を
しとておのきまつて人常におきて公家より出か
たり此故にわかれ簍くは簍くと云ふ也我々昔
より横道なりと云ふ簍くは簍くといふ公家より出
けり簍くは簍くは簍くは簍くといふ本綿より物
は故に漸く富より人よりいふて語終

或人のいつは太黒と福の神といふて萬人移ひ移し
此謂佛經より有るやされは我々の法といふといふ
云々此れ是を信仰といふを得なりといふといふ
先太黒い色思くきひいさく形といふく色思き
い善業のいさくありいゆりいけ短きい身と謙
ふ形なり是は米穀の信といふく財寶の信と
ふさう同じく小槌といふく人れ身と云々米穀
財宝を第一とす是は因縁といふくさういさ
とつはさうさういお出の小槌い四民といふ面
いさうされ家業職分の道具といふくといふ

を教りまされよの教りいふて勤けいふて
富貴よりて千萬人をもさういふて是福の神の
候なり世俗は木の板といふて造る處の太黒い靈
験ありといふ槌に通ぐさるゝ通て廣く万
民を渡り日夜踊りてさういふの板といふて造る
い見萬人は謙といふ諸人の膝下いなりといふ終は身と
くそ因縁達といふおふいふいふといふといふ
さい槌板といふいさういさういさういさういさう
世々信仰といふ太黒の像い日本太閤神の像い
い佛説といふ太黒太神といふいさういさういさう

天竺より摩伽迦羅天神として其神體を
るゝ像より摩伽迦羅といふ唐土の文字を
翻譯といふ大黒れ二字をあらうといふ今世は用ゆる所
の形像は日本神道の大神神として天竺の大黒
天神といふはあらうもの也といふは形像の
祇日本の人れ懷柔されて天竺にあらうといふと別
惠美酒神といふ子やゆきまといふ槌といふ土乃
和語といふ五穀萬寶といふより此はよ大神堅固
の法らといふて萬物をあらうといふと是大神なる福れ
神なり小槌といふより一皮といふはよ大神とまふ

くれ少げ絶えおとどくといふをて小の字を付
ふはものといふといふ

或人の曰日本正月の儀式は祇代の風俗といはる
清淨質朴といふといふ禮法なり松竹は直なる
姿常盤ちる色より人れ公の直なり常あたるを
あらうて蓬萊のいふ難黄のあらく本具たる美の
体像といふといふも人をてあらうといふ若さ
をあらうといふも是則て天地の仁心善ふあらう
れ放ちる飾のあらうといふく簡易なるをあらう七
日の難水十五日れ粥いづもて清淨なりて質素なり

昨日の小米のつて未飯と外に或の鯽の骨と煮
乃をぐいみお費といひり是る神代の遺風
往古の美膳なる事と示して未代乃者と云うぞ
けり終りのなりと云う

或人れ云武篇は武家業として町人の所作はあは
勇に町人といふとあるに有るは武篇と勇
とはまなす人あり町人の第一貨物に居るは
不自由は堪忍の外の名聞はあつてもおのく
職分とけりて家業の退屈せらる町人は常也
武篇は勝負の利あるに町人の勢と好むるは

武士は主人の身と責められ軍陣をけりて治
す終る世あり且志願つていと假初の末にあく
り武をつとめと主人は名紙死にやうなやう
と此れなり若多いそり死と安くとて町人
は主人ありとて又母あり武篇の佛といふ孝
れ第一也都て人間は生得の剛膽を義ある
人の剛は義ある人の膽より常にものゆきしる
如きりねいやるをわけと安くと死なうとい
是又義理の勇者ありては危角町人といふ終
るるを幸あれ武道のゆげとやう他の一錢

と早怯^{はやひ}たるゆゑにこそ町人の武勇^{ぶゆう}され乞^こへる
 勇^{ゆう}丈^{ぢやう}射御^{しやご}不達^{ふたつ}とも我^{われ}尚^{なほ}くい不^ふ惑^{まど}と聖^{せい}經^{きやう}をも
 るるま命^{いのち}いせしむるもの惜^{おし}まへは天^{てん}理^り自^じ
 然^{ぜん}たりある故^{ゆゑ}いのち露^ろらるるも惜^{おし}ひゆは
 つまに義^ぎいさみ血^ち氣^きも惜^{おし}たれらる廣^{くわう}言^{げん}なり
 一^{いつ}休^{きう}和尚^{やうやう}乃^の辯^{べん}世^{せい}のぞく今^{いま}そ死^しなむとぞ死^し
 なれしものいいて何^{なに}の恥^ち辱^{じやく}も感^{かん}ぜしはよ
 る故^{ゆゑ}くはれりてそ高^{かう}上^{じやう}たる辯^{べん}世^{せい}なり
 事^{こと}町人^{ちやうじん}はへたれしは莊^{しやう}子^しのいつる生^{せい}は天^{てん}れ
 吾^{われ}故^こ常^{じやう}死^しい天^{てん}の吾^{われ}と安^{やす}んぞといふなりゆ

死^しと畏^{おそ}る人^{ひと}れはあといふなりと語^{かた}れ
 或^{ある}人の咄^{はな}は宿^{しゆく}る百姓^{ひやくしやう}のいり子^こ樂^ら舞^ぶ較^{けう}奇^きと笛^{ふえ}
 をふれ習^なふ人^{ひと}とぬき器^き用^{よう}たる笛^{ふえ}れとかひて父^{ちち}
 一^{いつ}味^{あじ}悦^{えつ}らじいていつる我^{われ}子の笛^{ふえ}は器^き用^{よう}なりと各^{おのづか}
 々^{おのづか}れ我^{われ}耳^{みみ}といはれし音^{おと}色^{いろ}ふゆあり
 いは聞^{きこ}ては田^{でん}子^しはあはれとゆふといふは後^{あと}
 こいゆづれ田^{でん}子^しはあはれとゆふといふは後^{あと}
 中^{なかつ}にいへるや又^{また}我^{われ}宿^{しゆく}る町人^{ちやうじん}れ子^こ三^{さん}味^{あじ}線^{せん}を引^ひ
 習^なふものといふはゆふと味^{あじ}線^{せん}の音^{おと}は我^{われ}耳^{みみ}は
 わきあはれしはゆふとゆふとらんといふは

とつとほりまへ日傭とれ風情とせぬはる
べさうやく眉とあらて歎さるるを
人々寄合て物語もろ中人のふ金くよる
いぢれもの也大方富貴なる人ふ子やと壽育の
福を福われと壽を福壽もふ金に人々萬
人の中にも有じとおのゝやうなる田舎人の
ふけうやふが側よりけしきつるにねりあは
しきふふのふふのふれ我は里とていぢれ
人をうつじたやふいゆふふなる者ふ不足と
果報人ふとゆふとふふいふとふとふとふと我

とめ七人といふ何程の分限なくとも八目
銭三貫作といふ案いつらうやくといふ十餘と
目と齒と堅固とて食ふよく田植とてうきつ
てとふとけしきとて縄といふとふとふと
はまてとふとふとふとふとふとふとふと
人々感とてはるふ富貴なる人々欲い果る
ものかれ人の富貴と壽と事終るといふ
足事と知れい貧賤なりといふも富るとい
足事と知れい貧賤なりといふも富るとい
お人といふとけしきとけしきとけしきと

望みしれ身なれし中をわきまき人々あり
わきま又寄はる人いふ目うはく横よりゆ
りまのふりあふれちり世中口すみて止む
或学者れいり町人の学問いかりて叶はる物
かりとれり学問の致しやうて身の徳た
るも又損とちりしものも勉よく学いぬ
きはとこし学いてしもの益大かり悪
きいれしむく学いぬいかりき害とちり
廣く学いてい大かり害とちりしむく人
かゝの一事を二とせ学いぬしむく哲古修行

のちちとて友人を集り見臺しむいて聖
經を講談とてい輪講などそと多し
講談とて辨舌必習ふに思ふか学問必
て一藝とて辨舌必習ふて人よ高ぶんと
とらものちり根本学問の音曲の藝者の如
く辨舌音聲ふよる人よとてのよわと道理と
さしひる事明らふに辨舌必習ふに思ふな
くは何そ聖經の理と辨舌とふ辨舌んや但
口釋とはわいて物讀儒者もや後世の役
とせんといふ人い各別ちり町人の子り生

さて町人の家職といふもいふ所の家とて
一向は官俸禄のさへあるその家同士の其主
意改く道理もさうな家同乃を意よりあらに
一人は風俗萬人よりけりものあれいつたれく
世上の学問は風俗ありぬゆゑに学問をて身
の害くあらぬ教多しは故に神多れ志うを
やう肝要ある也とらりて町人の学問は別よ
みちりつらありといふ終し

町人囊卷一終

山

沸蟬之肉

和泉文

